

23年ぶりの学生生活

野 本 裕 美

1997年4月、中学1年生に世界の面積と人口のベストテンの国を見つけさせている。高校3年生には地理情報システム(GIS)の説明をしている。いつも通りの授業。あわただしい毎日。

昨年は私学研修員という名目で地理学科に通った。23年ぶりの母校であった。私は東京家政学院という私立の中高で地理を教えている。国内研修制度により、勤務先で週8時間の授業を持ちながら、大学でのいくつかの講座を受講した。研修テーマは一応決めたが、本音は卒業後20年以上も経って錆び付いた中古の知識を少しはブラッシュアップし、人文地理系の知識を得たかったのである。指導教官は教室内で唯一私の在学時からの先生である内藤教授にお願いした。

経済地理学、工業地理学を学び直すつもりでいた。GISについても知りたかった。人文地理学Aは地理情報システムの基礎事項とコンピュータを用いた初歩的な地図作成、地図計測の演習を行うという。是非受けたいと思ったが、受講条件はコンピュータの実習経験を必要とあった。事前に千歳先生からBASICの基礎、lineが書ける程度で良いと伺ったものの、プログラムを書いた経験もないので、事前準備にBASICの初歩を覚え始めた。演習が始まってからも、内容の復習で手一杯だった。

後期になって、気持ちの余裕もでき、地理の講座も増えたので、新しい地理学分野を覗いてみることにした。教室の先生方にご迷惑をかけながらだんだん羽を伸ばし、人文地理系の講座に首を突っ込んだ。頭が固くなっているし、難しい論文など20年も読んでいないから、配布資料に目を通すだけでは内容が掴めず、いくら読んで也十分理解できない。特に横文字やカタカナで表現される基本概念語に悩まされたが、学問の領域が多岐にわたり、「地理学」もさまざまな分野からのアプローチがあって、性差(ジェンダー)、社会的公正、文化相対主義など、「昔の地理学」とは違う

切り口の面白さにひきこまれた。都市構造を経済効率で考える状況を、「住む」という視点からとらえ直すと東京という町はどうなのか。新しい視点が当たり前ものを別の景色に変えた。

1年間はとにかく楽しかった。講義や演習が楽しかった。先生方が特別楽しく授業をして下さるからでなく(失礼?), 知識が学生時代と違って身近になっていたのでからだと思う。中高での授業の中で生徒に説明している教科書の一行一行が、具体的な事例や根拠を明らかにしながら証明され、知識が生きたものになるときの楽しさだった。例えば生徒と行く上野原の野外授業で見ている織物工場の、成立背景や機能分化形態を知った。ニューイングランドの織物業が衰退していく過程を、かつての丹後や米沢巡検で見た家内工業と現在の郡内機業を比較することで実感した。一面的だった環境破壊や都市問題などについて、途上国住民の生活水準の向上と環境保全は両立するか、のような対立する複数の視点で考えていく方法も得た。対象にどう迫るか、自分がどのような立場に位置するかに自覚的でなければいけないことも身にしてみた。

内田先生が声をかけて下さったので、3年生の夏休みの野外調査実習の高知巡検にも参加できた。私の経験していたかつての巡検は、現地の方々によるいろいろな施設の案内や、先生による露頭などの説明が中心のものだったが、今回参加した巡検は学生がグループごとに研究テーマを決め、事前調査、ゼミでの発表の後、現地調査を行なうことが中心だった。巡検前にはどうなることかと思ったグループも、現地調査の中で見違えるほど熱心になり、主体的に変わっていく様子を目の当たりにした。私は「山村のくらし」をテーマにしたグループの聞き取り調査に同行した。農村の高齢化、過疎化、山地での生活、困難な状況を抱えつつも、かえって、しし犬を飼い、猪狩りを楽しむという姿にゆとりさえ感じた。日曜日にこぞって車に乗ってリゾート地に出かけるのではゆとり

と言えるだろうか。今でもわずかに残っている「焼畑」が土地に根ざした合理性を持ち、技術を必要とする農業形態だとわかり、発展途上国の焼畑農業を後進的と決めてしまう間違いに気づかされた。高齢者は村で充足した生活をおくっているが、若者は高校から高知市内に流出し、村内に魅力ある雇用の場を創出できないまま、山村の過疎化が止めようもなく進んでいく現状もあった。

後期が始まるとすぐに巡検報告がグループごとに出され、素早く製本され、立派な冊子になって手渡された。厳しくハッパをかけるわけではなく流れを作っていく内田先生の学生操縦術の巧みさには見習うことが多かった。

2, 3年生と一緒に講義を受けていたのでだんだん顔見知りの学生も増えてきた。「今どきの学生」の素顔も見えてきた。特に巡検終了後の後期には3年生とおしゃべりもできるようになって「学生生活」を大いに楽しんだ。自分の娘と言ってもおかしくない年頃の学生たちであったが、普段教師の立場で見ている高校生と違い、仲間としての会話ができ、学生の立場から見た授業や、大学、高校に対する不満も聞くことができた。

開発地理や地理学特講Ⅴなどゼミ的な講座では、学生たちのとらえ方が違うことに気づいた。戦争に行った父、空襲を経験した母を持つ私に対して、

彼女たちは石油危機後に生まれ、豊かな時代を過ごしてきた。彼女たちは他人事のように日本の過去や第三世界をとらえている。高校生も彼女たちと同じようにとらえているのではないか。経験だけに寄りかかっているとは思われないものがある。当然分かっていると思っている歴史認識が共通でないことを理解しないと、こちらの考えも伝わらない。お互いの考えを分かり合う難しさ。だからこそ伝わったときの嬉しさ。

先生方にとっては、研究者でもない者が講座をかき回してご迷惑であったことだと今更ながら反省しているが、1年間でいろいろ覗いてみたい私にとっては、とても居心地の良い教室だった。学生時代、もっと真剣にいろいろ挑戦しておけば良かったのにと思いつつ、めいっばい楽しんだのかもしれない。先生方、助手の山田さんには本当に感謝している。3年生に社会人入学の藤掛さんがいたことの意味も大きい。私にとっては学生との距離を縮める格好のサポーターだった。地理学科のみなさんに対してお礼の気持ちをどう表現したらいいか分からないが、勤務先の生徒たちに、今回知った視点を示すことで学ぶ楽しさを伝えていきたい。

プブとその人々

森 本 泉

ポカラ市郊外にあるダムサイドは、ペワ湖の湖畔にある。ツーリストがボート遊びをする湖の対岸には青々とした森が広がり、晴れの空にはマチャブチャレ(魚の尻尾という名のとおり、頂上魚の尻尾のように見える山)が白く鮮やかに浮き上がっている。ダムサイドの沿道を埋めるホテルやレストラン、旅行代理店、それに建築途中の建物や山積み資材があちこちに見受けられる。ツーリストがちらほら通り過ぎる道を、牛や水牛がゆったりと歩き、寝そべったりしている。道より少し内側に入れば、鶏や豚の鳴き声も聞こえてくる。ダムサイドはガイドブックにツーリストエリアとして紹介されているが、喧騒とはおおよそ

無縁で、時間がゆったりと流れている。

プブとの出会い

プブ(父方の叔母に対する呼称)に初めて会ったのは1994年の春、私が初めてネパールへフィールドワークに出掛けた時のことである。彼女の名前はアーサ・マヤ グルン、ポカラ出身の65才の女性である。グルンというのは、ネパールの民族集団の一つである。19世紀末以降、特に世界大戦において、勇敢な兵士として世界に名を馳せたグルカ兵を多く輩出してきた民族集団でもある。

プブは約40年前にダムサイドの住人となった。彼女が移住してきた頃は、何もなかったというダムサイドに、ホテルやレストランなどが建ち並ぶ